

《研究ノート》

## 流通経済大学スポーツ健康科学部における教育実習に関する調査報告 —2022年教育実習振り返りアンケートから—

松田 哲

Research report on educational practice at RyutsuKeizai University

—Educational training questionnaire in 2022—

Tetsu MATSUDA

キーワード：スポーツ，教育実習，保健体育，コミュニケーション，生徒理解

Key Words: Sports, Educational training, Health and physical education, communication, Student understanding

### 要旨

本調査は、流通経済大学スポーツ健康科学部で保健体育の教育実習生として実習を終了した学生を対象に、実習終了後のアンケートを集計し報告したものである。これまでも事後アンケートを実施してきたが、担当種目や担当単元が中心であったことから今回の調査では、2019年度から継続している「苦労したこと」についての調査項目を「授業編」，「生徒理解編・人間関係編」，「その他」の4項目に分けて聞いている。

授業編では「指導案の作成について」，「教材研究について」，「安全面への配慮や立ち位置について」が上位3項目，生徒理解・人間関係についての上位は，「生徒との距離感の取り方について」，「生徒への褒め方や叱り方について」，「生徒とのコミュニケーションの取り方について」の順となっている。例年多少の順位変動はあるものの基本的な上位項目は同じであった。また「今後大学で取り入れてほしい内容」についても調査項目に含めて，学部全体として共通理解を図る資料としたい。

## 1. 2022年度の状況と調査項目

2022年度になってもコロナ禍の状況は続いているものの、昨年のような緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置が出されることはなく、教育実習の実施時期などではコロナ禍以前の状況に戻りつつある状況であった。

しかし、教育実習前の検温やうがい手洗いといった基本的な感染防止対策は続けるように指導しており、実習校でも検温を義務付ける学校も少数ながら見られた。一方でコロナ禍を理由

に、教員による訪問指導を取りやめる学校はなかった。

2022年度の教育実習実施者は、83名（スポーツ健康科学科50名、スポーツコミュニケーション学科33名）であったが、秋学期への変更はなく、教育実習を行った全体の80.7%が春学期の実施であった。（表1参照）

当該アンケートは教育実習終了後、2週間以内を目安にWebで回答させたものであるが、報告書を作成している段階では調査回答者（N）は82名であった。

表1 2022年度教育実習実施状況（保健体育）

教 科	教育実習申請	実習実施者		教育実習特例	実習辞退
		春学期	秋学期		
保健体育	83名	67名	16名	0名	0名

調査項目	
1. 教育実習を実施した校種	15. その他自由回答
2. 母校での実習かどうか	16. 大学の授業で取り入れたいこと
3. 教育実習時期	17. その他自由回答
4. 教育実習の開始時期	18. コロナ禍に関する自由回答
5. クラス担任は何年生	19. 今年教員採用試験受験の有無
6. 体育実技の担当学年	20. 卒業後の講師希望
7. 保健体育の担当学年	21. 教育実習を経験してよかったか
8. 体育実技の授業スタイル	22. 高校の体育実技で実施した単元
9. 授業を実施した回数	23. 高校の保健で実施した単元
10. 自分一人で授業をした回数	24. 高校の保健体育以外の実施科目
11. 本気で教師になりたいと思ったか	25. 中学校の体育実技で実施した単元
12. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（授業編）	26. 中学校の保健で実施した単元
13. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（生徒理解）	27. 中学校の保健体育以外の実施科目
14. 教育実習で苦勞したことや上手くいかなかったこと（その他）	28. 所属学科

## 2. 分析結果

### 1) 回答者の属性

回答者数は82名（全体の96%）であり，回答者の属性は，スポーツ健康科が49名（98%），スポーツコミュニケーション学科が33名（100%）であった。実習校は高校が52名（63.4%），中学校21名（25.6%），中高一貫校9名（11.0%）であった。実習期間は3週間が76名（92.7%），2週間が6名（7.3%）であった。教育実習先の学校が出身校であるかどうかでは，出身校が79名（96.3%），出身校以外が3名（3.7%）であった。（表2参照）さらに教育実習の時期は5～6月が63名（76.8%）と最も多くなっている。（表3参照）

### 2) 体育実技と保健の担当学年

教育実習では，クラス担任に付いて学級経営やクラス運営なども学んでいくことになるが，

中学校では1年生（9名11.0%）と2年生（9名11.0%），高校では2学年（27名32.9%）が多くなっている。中学校では3年生（5名6.1%）を担当するケースは少なくなっている。

次に体育実技を担当した学年は，中学校では1年生（21名25.6%）が最も多く，2年生（13名15.9%），3年生（13名15.9%）の順となっている。高校では1学年（41名50.0%）が最も多く，2年生（40名48.8%），3年生（38名46.3%）の順となっている。

続いて保健を担当した学年は，中学校では1年生（4名4.9%），2年生（8名9.8%），3年生（8名9.8%）で，高校では2学年（36名43.9%）が最も多く，1年生（27名32.9%），3年生（4名4.9%）の順となっている。総数で見ると中学校で「保健」科目を担当した学生が13名（中学校実習者の62%）であるのに対して，高校は51名（高校実習者の98%）とその殆どが保健科目

表2 回答者の属性

所属学科	スポーツ健康科学科49名（98%）			スポーツコミュニケーション学科33名（100%）
実習校	高校52名（63.4%）	中学校21名（25.6%）	中高一貫9名（11.0%）	義務教育学校0名
実習期間	2週間 6名（7.3%）			3週間 76名（92.7%）
出身校の有無	出身校 79名（96.3%）			出身校以外 3名（3.7%）

表3 教育実習開始時期（2019～2022）

（人）

実習開始時期	2022年度	2021年度	2020年度	2019年度
5月	47	56	2	3
6月	16	9	1	64
7月	0	0	0	3
8月	2	1	6	1
9月	9	7	30	4
10月	6	8	43	0
11月以降	2	5	6	0

※数値はアンケートの回答数から算出

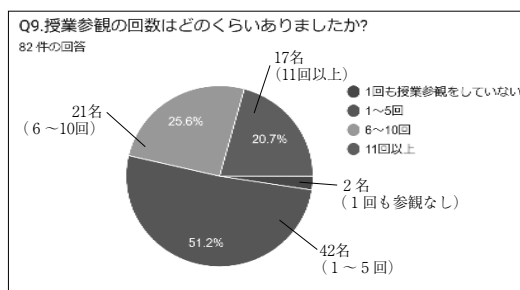


図1 授業観察の回数

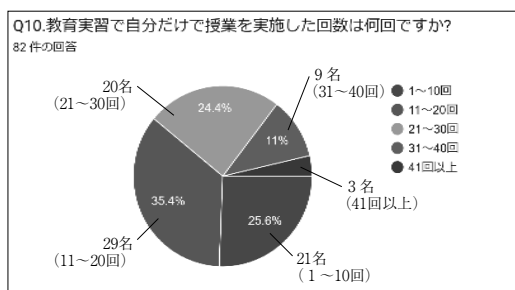


図2 自分一人での教壇実習の回数

を担当している。

そして、体育実技の授業スタイルは中学校・高校を併せて、男女共習(38名46.3%)が最も多く、男子クラス(35名42.7%),女子クラス(30名36.6%)となっている。

### 3) 授業観察と教壇実習

続いて授業観察と教壇実習であるが、授業観察は5回以内が42名(51.2%)と最も多く半数を占めている。続いて6～10回が21名(25.6%),11回以上17名(20.7%)の順となっている。(図1参照)

次に自分自身で授業を行う教壇実習についてだが、ここではTTではなく自分一人で授業を行った回数を聞いている。最も多いのは11～20回で29名(35.4%),次いで10回以内が21名(25.6%),21～30回20名(24.4%)の順となっている。最も多くの教壇実習を行ったのが41回以上の3名(3.7%)となっている。(図2参照)

### 4) 体育実技の担当単元と保健の担当単元

#### 【中学校】

まず体育実技であるが、中学校では陸上競技だけで16名が授業を担当している。(リレー5名、短距離3名、ハードル3名、持久走3名、

走り幅跳び1名、その他1名)それ以外では、器械運動(マット運動)10名、バレーボール4名、体づくり運動4名、ダンス3名の単元が多くなっている。当然時期が5～6月が多いことから、担当単元は時期によって異なってくるが、陸上競技以外は比較的体育館内での単元が多くなっているようである。(図3参照)

#### 【高等学校】

次に高校の体育実技であるが、バレーボール27名、野球・ソフトボール22名、バスケットボール15名が多く、次いでサッカー13名、陸上競技13名、バドミントン11名、体力テスト10名の順となっている。(図4参照)中学校に比べると高校の方が単元の範囲が広い傾向にあるようである。

続いて保健だが、中学校は21名の実習生の内13名(62%)が保健の授業を担当している。高校が98%(52名中51名が実施)の実習生が保健科目を担当していることに比べると、中学校では保健科目の担当が少なくなっている。

その中でも担当が多い順にみると、「生活習慣病とその予防」(6名25%),「運動・休養と健康」(4名16.7%),「体育理論」(2名8.3%)であり、あとは「食事と健康」「飲酒と

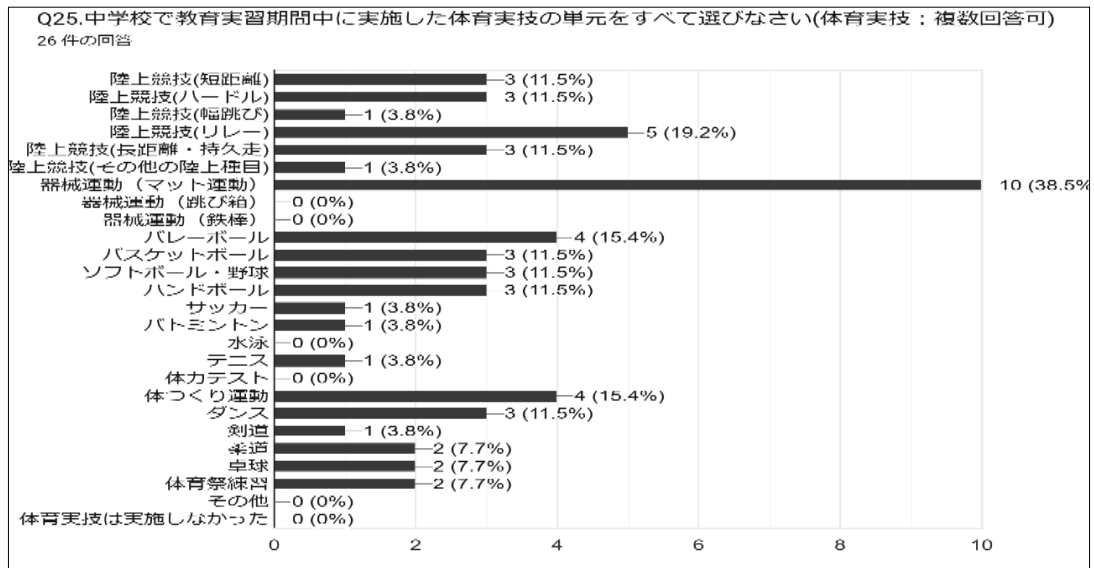


図3 中学校での体育実技の単元(複数回答)

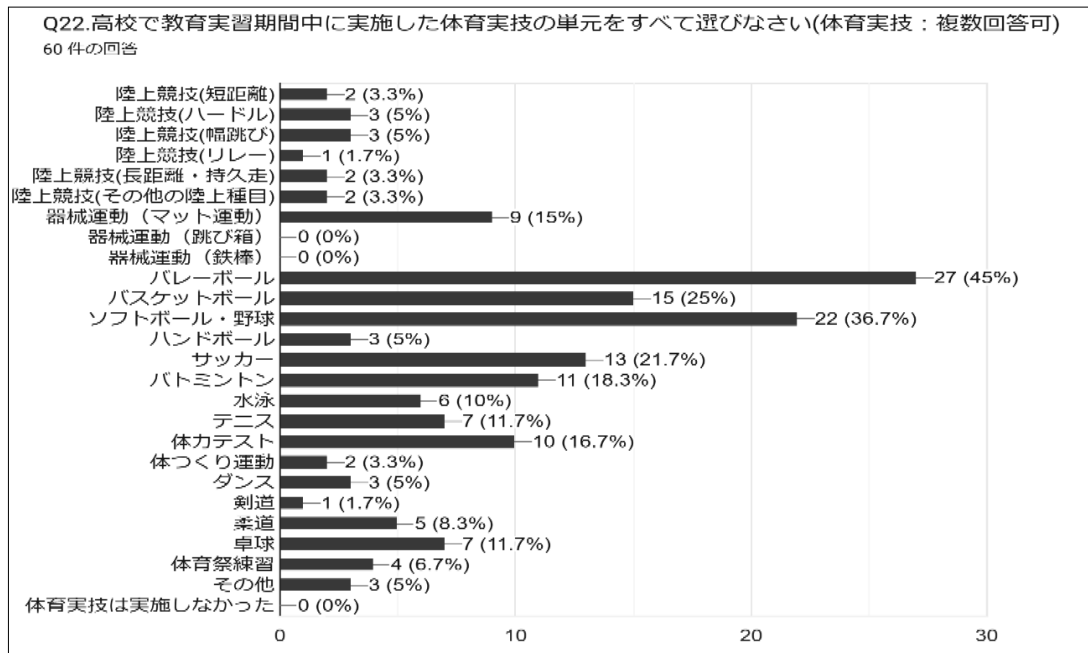


図4 高校での体育実技の単元(複数回答)

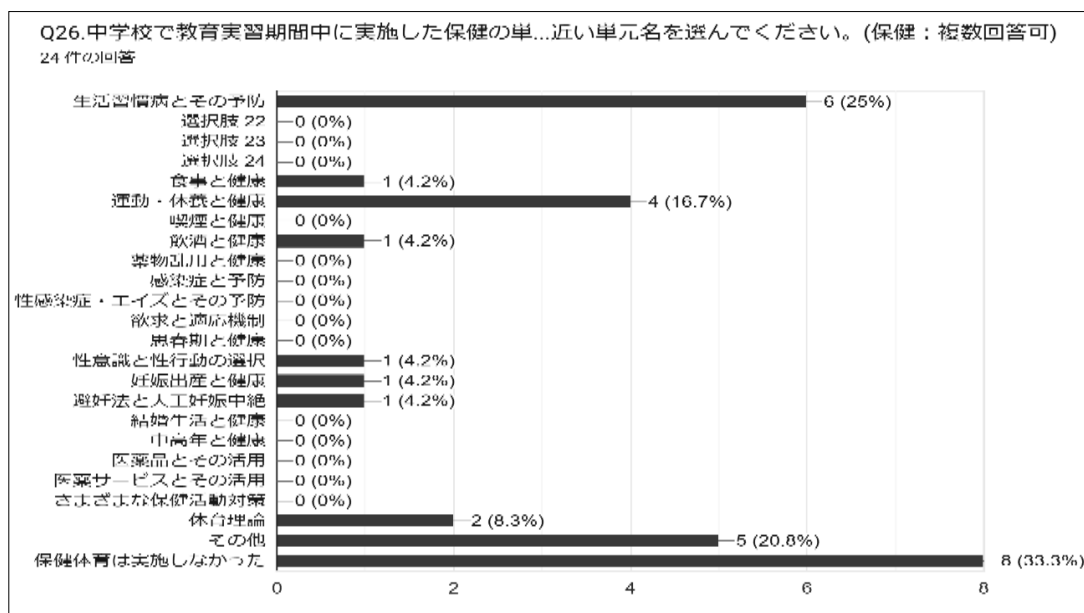


図5 中学校での保健で担当した単元（複数回答）

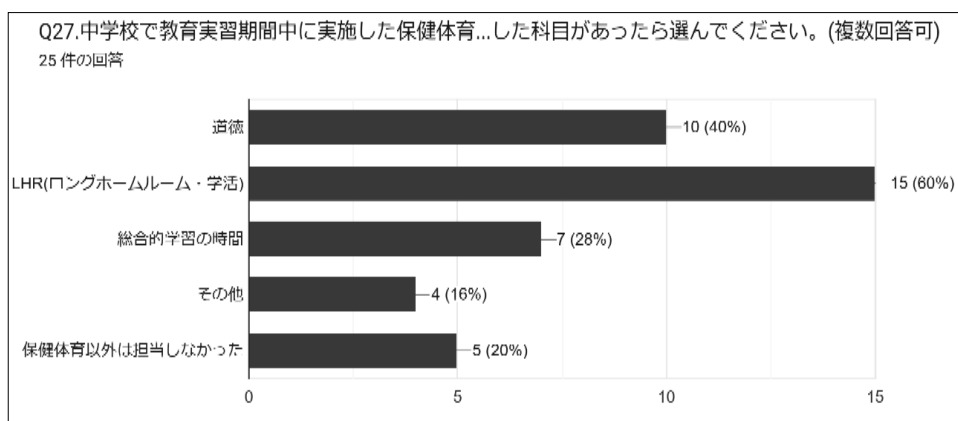


図6 中学校での保健体育以外で担当した単元（複数回答）

健康」「性意識と性行動の選択」「妊娠出産と健康」「避妊法と人工妊娠中絶」の単元が1名ずつであった。(図5参照)

保健以外でどのような教科を担当していたのかを示したのが図6である。中学校ではLHR15

名(60%)、次いで道徳10名(40%)、総合的学習の時間7名(28%)であった。2021年度が「道徳」24名(66.7%)であったことから、道徳の担当はかなり減ったようである。

大学の教職課程でも中学校免許状には「道徳

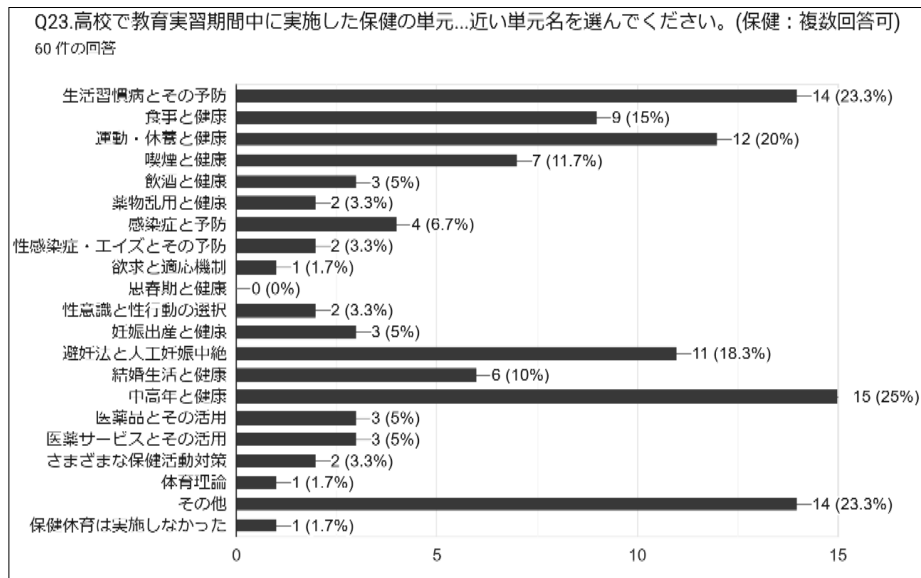


図7 高校での保健で担当した単元（複数回答）

教育論」が必修化されているが、教育実習では専門科目に限らず道德教育の教材研究や指導方法も必要になってくる。

一方高校は、担当学年によって単元は変わるものの幅広く保健の単元を担当していることが分かる。(図7参照)

高校において保健体育以外で担当した単元としてはLHR40名(80%)が最も多く、次いで総合的学習の時間18名(30%)となっている。高校では道德3名(5%)は担当が少なくなっている。

## 5) 教育実習で苦勞したこと(授業編, 生徒理解・人間関係編, その他)

ここでは実習校種に限らず、教育実習で「苦勞をしたこと」について、「授業編」「生徒理解・人間関係編」「その他」に分けて複数回答で回答したものをまとめたものである。

まず授業編では、「指導案の作成について」61名(74.4%),「教材研究について」46名(56.1%),「安全面への配慮や立ち位置について」44名(53.7%)の上位3項目で150名を超えている。続いて「授業の仕方や方法について」42名(51.2%),「自分の専門外の種目について」34名(41.5%),「運動能力に差があるクラスの指導について」26名(31.7%)となっている。指導案作成は学校種や教科にかかわらず教育実習生にとって苦勞の種となっている。上位3つの項目は教育現場に則して学んでいく側面があることから、大学教育だけでなく教育実習を通して身につけることが多いスキルともいえる。(図8参照)

次に図9は教育実習中の生徒理解・人間関係について苦勞したことについて回答したものである。上位なのは、「生徒との距離感の取り方について」33名(40.2%),「生徒への褒め方や叱り方について」32名(39.0%),「生徒とのコミュ

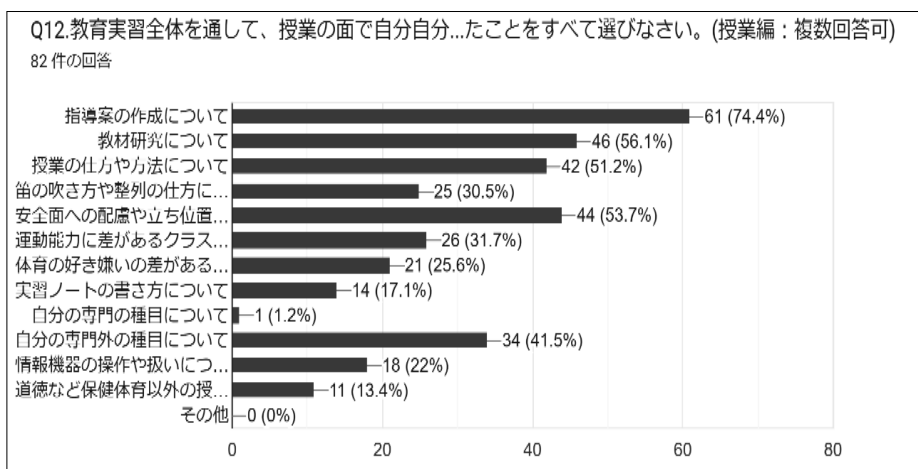


図8 教育実習全体を通して授業の面で自分自身自身が苦勞したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(複数回答)

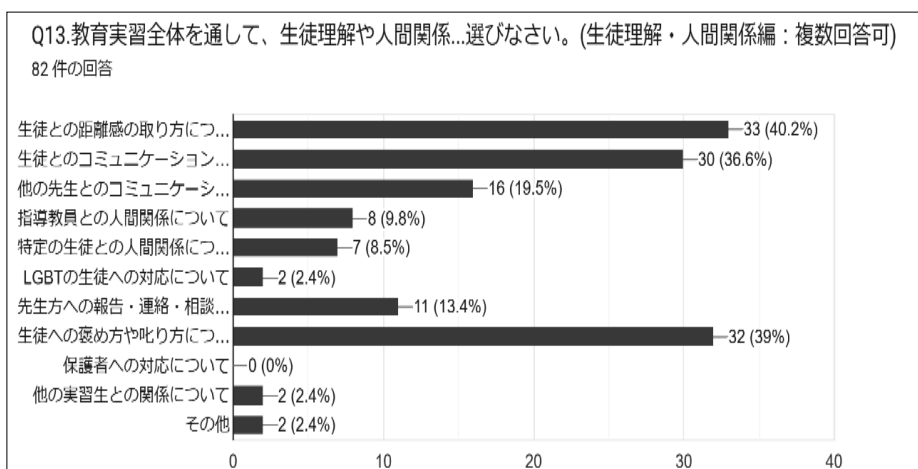


図9 教育実習全体を通して、生徒理解や人間関係の面で自分自身が苦勞したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(複数回答)

コミュニケーションの取り方について」30名(36.6%)、と上位3項目で約95名となっている。これらはいずれも生徒との関係についての課題である。実習校ではコロナ禍の影響から給食は黙食が奨励されるとともに、マスクの着用などもあり、事後報告では「生徒の顔と名前を覚えるのに苦

勞した」ことや「授業時間以外でのコミュニケーションの取りづらさ」を報告する学生も少なくなかった。続いての項目を見ると「他の先生とのコミュニケーションの取り方について」16名(19.5%)、「先生方への連絡・報告・相談について」11名(13.4%)、「指導教員との人間



関係について」8名(9.8%)、など、先生との関係づくりに苦勞をしている実習生が多いようである。「LGBTの生徒への対応について」2名などがあげられていることも注目できる。(図9参照)

続いてその他の苦勞したことであるが、最も多かったのは、「睡眠時間の確保について」53名(72.6%)である。ここでも多くの回答項目を用意したが、回答があった項目のみグラフに記載した。この項目は自分自身についての項目だが、それ以外は、「部活動の指導について」21名(28.8%)、「アクティブラーニングについて」8名(11.0%)、「SNSの取り扱いについて」6名(8.2%)、「コロナ禍対応」6名(8.2%)など学校教育のなかでの項目が多数回答されている。(図10参照)

## 6) 大学の授業で取り入れてほしい内容

ここでは、大学の授業で取り入れてほしい内容について複数回答で求めた。上位の項目を見ると、「体育実技の指導案作成の機会を増やす」56名(68.3%)、「保健の指導案作成の機会を増やす」50名(61.0%)、「体育実技の模擬授業の学習機会を増やす」47名(57.3%)、「体育実技の教材研究についての学習機会を増やす」45名(54.9%)、「保健の模擬授業の学習機会を増やす」44名(53.7%)となっている。これらはいずれも保健体育の授業に対する内容となっている。特に体育実技に対する項目が上位になっている。(図11参照)

その他大学で取り入れてほしい内容として自由

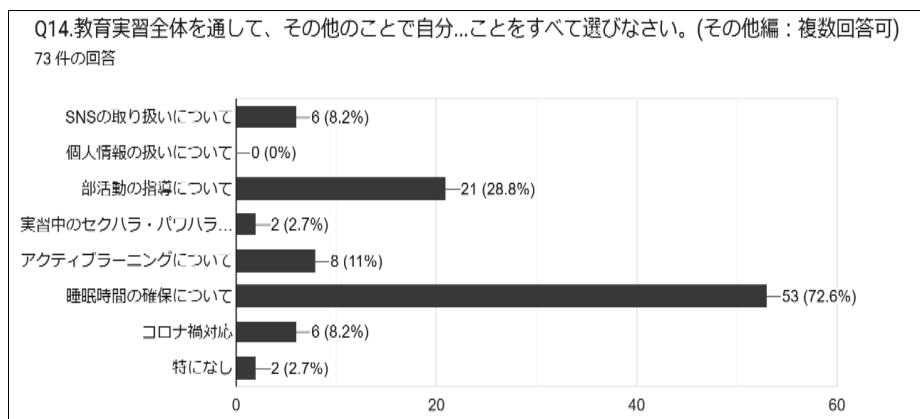


図10 教育実習全体を通して、その他のことで自分自身が苦勞したことや上手くいかなかったことをすべて選びなさい。(複数回答)

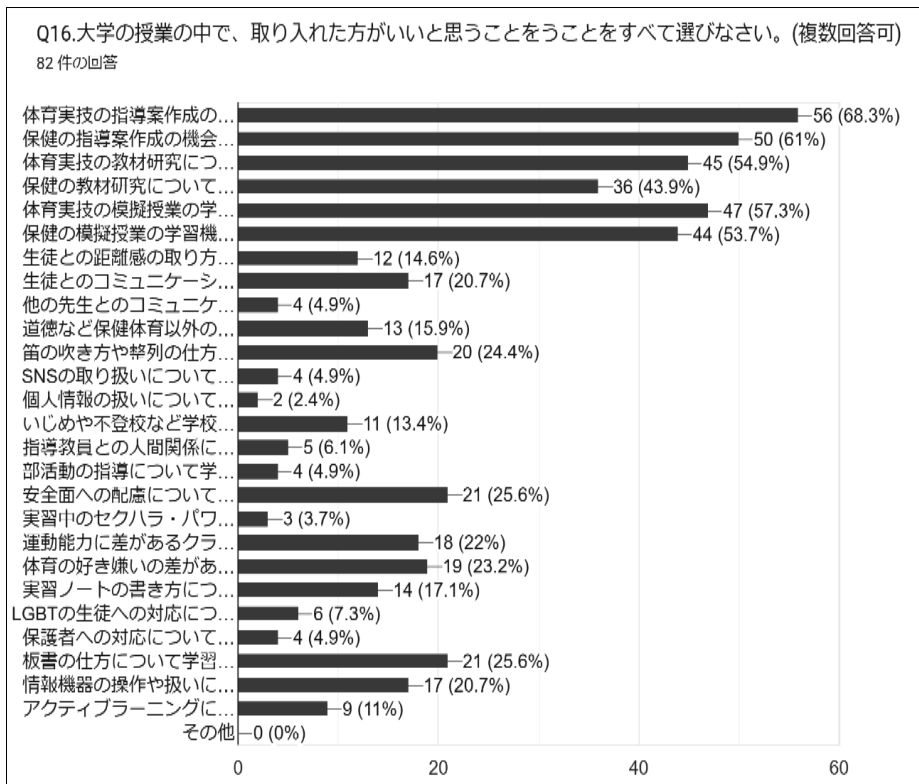


図11 大学の授業の中で、取り入れた方がいいと思うことをすべて選びなさい。(複数回答)

回答での記述を以下にまとめる。

- ・大学側で指導案の留意点などの記載されているフォーマットが欲しい
- ・特別指導の生徒への対応の仕方
- ・保健を学ぶ期会をもっと取った方が良い
- ・全ての実技を習いたい。競技を楽しむだけでなく、どこがポイントなのかなどの基礎技術の習得、指導方法の習得をするべきだと思った
- ・もう少し教育実習の準備についての授業があってもよかったのかなと思いました

またコロナ禍であったことで大変だったと思う

ことについて自由回答での記述を以下にまとめる。(抜粋)

- ・コロナ禍によって、運動する習慣のある生徒が少なくなっていた。またそれが原因で、全体的に体力が落ちていた
- ・マスクをして指示を出しても声が通らなかったこと
- ・実際に実技の授業を行っていてマスクを外させてやらしてもよいのかの判断が難しかった
- ・体育の授業の時にほとんどの生徒はマスクを外して行っていたが、マスクをつけて授業を受けている生徒がいたのでどのように声をかけるべきなのか迷いました。
- ・生徒との距離を近すぎず、いい距離感で保つ

ことが大変でした

- ・マスクをしているので生徒の顔と名前を一致させるのに時間がかかった。声量や生徒への理解がしづらい気がした
- ・コロナ禍ということでマスクをしながら実技をやることで熱中症になる生徒がいて大変だった
- ・体育の接触機会を減らすようにすること
- ・自分は何事もなくとも、家族など身内が新型コロナウイルス感染症に感染すると自分自身も何もできなくなってしまうこと
- ・昼食を食べる際クラスでは喋ることが出来なかったため、コミュニケーションを取る機会が少なかった
- ・オンラインの生徒がしっかり授業を聞いているかわからない
- ・保健の授業がコロナによりオンラインに変更になってしまった
- ・コロナ対策で、1週間目は4限目までの授業となり、体育や保健、LHRの授業をする機会が減ったこと。また、体育の授業では更衣室が狭いため3クラスが着替えるには分散しないといけないため、更衣に授業時間をかなり使ってしまう実技をする時間が少ないこと
- ・学級閉鎖のクラスが増えて、担当クラスではないクラスを急遽授業しなければいけなかったこと。(生徒観が分からない)
- ・体育の授業でもマスクをしながらやらないといけなかったのと、体力測定でシャトルランがあり、終わった生徒たちを休憩させたり、水を飲みに行かせたりしたのですが、シャトルランも見ないといけないうことと、その休憩をしに行った生徒の様子も見ないといけないうことが大変でした
- ・学級閉鎖になるクラスがあり対応が大変だった

た

- ・生徒の表情がわかりづらい
- ・女子生徒とのコミュニケーションの取り方について
- ・声を出す時マスクをしているためいつも以上に声を張らなければならない

## 7) 本気で教員になりたいと思ったかと教員採用試験の受験

教育実習を終了した学生は、実習を通して本気で教員になろうと思ったのだろうか。「なりたかったと思った」38名(46.3%)と「どちらかというとなりたいと思った」15名(18.3%)となっている。回答者の64.6%の学生は、教育実習を通して本気で教員になろうと思ったということになる。(図12参照)

続いて今年の教員採用試験の有無を聞いたところ、受験した学生が33名(40.2%)であり、受験しなかった学生が49名(59.8%)であった。教員を目指して教員採用試験を受験した学生数(33名)に比べると、教育実習を通して教員になりたいと思った学生(53名)が20名程度増えたということになる。

卒業後に講師を希望するかということについては、「講師を希望している」32名(39.0%)、「まだ決めかねている」22名(26.8%)、「一般企業を希望している」21名(25.6%)、「その他の公務員を希望している」4名(4.9%)であった。まだ決めかねている実習生を除くと、講師を希望しない実習生は26名(37.6%)と講師を希望する実習生より少なくなっている。(図13参照)

また今回の調査では、教育実習を経験してよかったと思うかを聞いている。その結果「すごく良い経験だった」77名(93.3%)、「どちらと

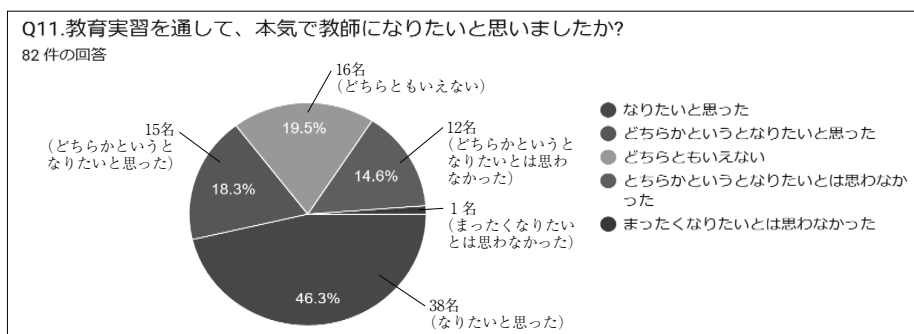


図12 教育実習を通して本気で教師になりたいと思ったか

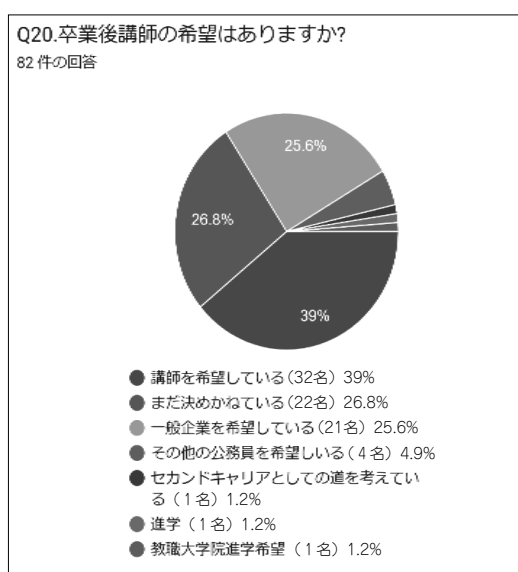


図13 卒業後講師の希望はあるか

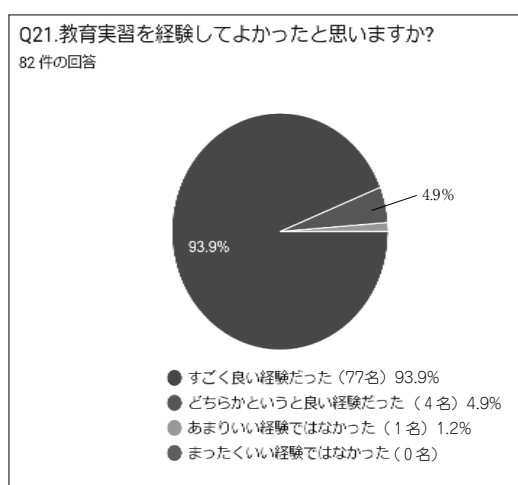


図14 教育実習を経験してよかったか

いうと良い経験だった」4名（4.9%）,「あまりいい経験ではなかった」1名（1.2%）であったことから、教育実習を経験したことは殆どの学生にとって、良い経験となっていることが分かる。（図14参照）

#### 4. まとめと課題

2022年度は昨年同様コロナ禍の影響が続いたものの、各地で緊急事態宣言が出されることもなく、実習時期もコロナ禍以前のように春学期に多くの実習が実施できるようになっていた。しかし実習現場では分散登校や給食での黙食、オンライン学習や蜜を避けながらの体育実技や

マスク着用での授業など、感染防止対策が継続される中での教育実習であった。

しかし、同じコロナ禍であっても昨年度との違いは、実習時期の多くがこれまで通り春学期に実施されたことと、教育実習特例や実習期間の短縮などの学生が一人もいなかったことである。また本学から実習校への訪問指導が行えたことも昨年度との違いであった。

そのような環境の中でも教育実習を経験したことで「本気で教師になりたいと思った」学生は回答者の64.6%であり、また教育実習を経験してよかったと思うかについては97.2%の学生が「良い経験であった」としている。

さらに実習先で苦労したことなども、授業面や生徒理解・人間関係の側面、その他のことでも、上位を占める選択項目などは2019年度のコロナ禍前とほぼ同じ傾向となっている。

2020年からのコロナ禍の影響は教育現場で授業スタイルや生活スタイルなど大きな変化をもたらしているが、教育実習生がその経験から得た学びや苦労をしたことなどは大きく変化していないことが分かった。

そのような中で、本学でも今年度教員採用試験受験者数は、受験しない実習生を下回っているものの、卒業後の講師希望者については講師を希望する学生の方が多くなっていることはこ

れまでの違いである。64.6%の実習生が、本気で教師になりたいと思った（「どちらかというとなりたい」を含む）ことから、教育実習の経験・体験は多くのことを実習生に考えさせるきっかけになっていることがうかがえる。

大学の教職課程も大学独自の自己点検評価の導入が検討されているが、教育実習も点検・評価の対象となる。これまで教育実習先は大学の所在地近隣の学校に協力を要請し、大学側も実習校と連携しながら実習に当たることも指摘されていた。本学では年間の実習生数の多さから、提携する実習校を増やすことが困難なこともあり、母校実習が多くなっているが、全員の实習生に大学の教員が指導担当教員として指導に当たり、全部の実習校に訪問指導に伺い指導するなどきめ細かな指導を展開している。

今後は教育実習に送り出す学生の質を客観的に捉え検証するとともに、本学の目指す教師像や目標に対し達成度を確かめる指標作りも課題としてあげられる。

#### 【参考資料】

- ・流通経済大学教職課程「履修の手引き」2022
- ・『スポーツ健康科学部紀要第15号「流通経済大学スポーツ健康科学部における教育実習に関する調査報告－2021年教育実習振り返りアンケートから－」流通経済大学出版会2021